

今こそ音楽を!

菅野恵理子 (音楽ジャーナリスト)



第5章: 大学最新カリキュラム編

はじめに

「今こそ音楽を!」第5章では、大学の最新カリキュラムについて取り上げる。大学を3タイプに分類し、各大学でどのような新しいカリキュラムがあるのか、どのような背景と経緯から生まれたのか、などを取材した。

これまで音楽は主に音楽大学で専門的に教えられてきたが、最近は音楽科目を開講する総合大学も現れ始めている。それは、リベラルアーツとしての音楽である(1)。日本ではまだ僅かであるが、アメリカではほぼ全ての大学で音楽科目が開講されている。音楽を習ってきた学生も、初めての学生も、ともに学べる音楽とは。音楽という資源をどのように生かしているのだろうか。また音楽学部や学科がある総合大学(2)では、どのように音楽を位

置けているのだろうか。他学部や他学科の学生も音楽を学べるのだろうか。

音楽の学び方が広がってきた一方で、音楽を専門的に学ぶ人はどう深めていけばいいだろうか(3)。変わりゆく社会環境の中で、音楽大学ならではの意義を示しつつ、どのようにその才能や資源を伸ばしているのだろうか。

さらに番外編として、中等教育での最新動向にも注目した。最近日本でも増えつつある国際バカロレア校では芸術科目が重視されているが、音楽科の授業はどのように展開しているのかを取材した。(国際バカロレアについては、第1章・第6回記事をご参照くださいhttp://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/2015/05/21_19671.html)

(1)音楽で思考法、実践力、創造力を養う～総合大学教養科目

- ・慶應大学: 知識は実践してこそ! 「身体知・音楽」とは

(2)音楽を深く学んだ社会人を育てる～総合大学音楽学部・音楽専攻

- ・青山学院大～方法論、発見する力、コラボレーション
- ・フェリス女学院大学～音楽が心にある豊かさ
- ・金城学院大学～音楽を通じてこそ得られる体験を

(3)音楽の可能性をさらに掘り下げて～音楽大学

- ・東京芸術大学～国を超えて相互交流を(スーパーグローバル大学創成支援校)
- ・東京音楽大学～創作&アレンジ力も&コンポーザーピアニスト
- ・昭和音楽大学～音大が持つ資源を掘り下げる&広げる

(番外編)国際バカロレアで学ぶ音楽

- ・東京学芸大付属国際中等教育学校

① 音楽で思考法、実践力、創造力を養う

～総合大学教養科目目

慶應大学 ～知識は実践してこそ！「身体知・音楽」とは？？

私立総合大学最高峰の一つ、慶應義塾大学では多彩な音楽科目が開講されている。中でも「身体知・音楽」(*)という科目は、一般学生が教養として音楽を学ぶ意味がよく分かる授業だ。現在、声楽アンサンブルと古楽アンサンブルの二つが開講されている。これは教養教育センターが主催している科目で、ほかに「身体知」「身体知・映像」などがある。「身体知」という言葉に、どんな学び方の鍵があるのだろうか。日吉音楽研究室の佐藤望先生にお話をお伺いした。

※「身体知・音楽」には、合唱音楽を通じた歴史的音楽実践（声楽アンサンブル）と、古楽器を通じた歴史的音楽実践（古楽アンサンブル）がある（住友生命保険相互会社寄附講座）。現在声楽アンサンブル48名、古楽オーケストラ20名、オーケストラ40名で、その他オペラや弦楽四重奏のクラスもある。新年度よりジャズのクラスが開講予定。また教養教育センターではアカデミック・スキルの授業も開講している。英語ディベートクラスでは「安楽死」「原発再稼働の是非」などをテーマに討論するそうだ



佐藤望先生

一般学生が教養として音楽を学ぶ環境～身体知・音楽とは何か

頭で考えたものを行動で実践していく「身体知」

― 慶應の教養教育センターが提唱する「身体知」とは、どのようなコンセプトでしょうか？

学問として頭で考えて学んだものを、外に向けて意味のあるものとするためには、社会に目を向け、身体で行動を起こしていく必要があります。たとえば文学のワークショップでは、演劇・舞踊・歌・文学等を通して、どのようにコミュニケーション力を高めることができるか、社会貢献がどうできるか、などを研究しています（担当：横山千晶教授）。最近では横浜の一部の簡易宿泊施設の集中する地域で、産業社会の底辺を支えてきた人たちが人知れず身体を痛めて亡くなっていくケースが増えていますが、そこで何が起きているのかといった社会問題にも目を向けていこうとしています。

― 佐藤先生のご担当されている声楽アンサンブルでは、どのような授業を行うのでしょうか。またどのように「身体知・音楽」というコンセプトを体現しているのでしょうか？

今年の声楽アンサンブルでは『地球へのバラード』（三善晃作曲・谷川俊太郎作詞）を仕上げ、2016年2月に岩手県大槌町と花巻市で歌う予定です。提案して下さったのは、花巻市に避難中の子供たちにも合唱指導されている声楽家の古川精一先生です（宮澤賢治児童合唱団）。これまで横浜市との社会連携は行ってきましたが、もう少し広がっていくことになりました。

では、なぜ『地球へのバラード』なのか？三善晃、谷川俊太郎は同じ年代・場所（東京都杉並区）に生まれ、ともに学生時代の最中に、焼夷弾が落ちていく中を走って逃げるという戦争体験をしています。お互いに通じ合うものがあったのです。谷川の素晴らしい詩に三善晃が渾身の作曲をしたわけですが、大学生を念頭においた響き・リズム・メッセージが込められていて、私自身も高校時代に初めて聴いて感動したのを覚えています。ぜひ学生と一緒に歌いたいと思います、昨年も年間26回の授業で全5曲を仕上げて演

奏会を行いました。

大槌・花巻では、私が編曲した「故郷（ふるさと）」などの唱歌も歌います。実は企画段階で、大槌町のNPOの方から「復興米でおにぎりを作しましょう」とご提案を頂きました。復興米とは、津波に流されて全てを失った土地で、偶然岩陰に残っていた数本の苗を大事に育てて作ったお米です。それを頂いて、その場で歌います。学生には、学校と大槌で「故郷」を歌う重みの違いを感じてほしいのです。

この他、声楽アンサンブルクラスでは『バッハのモテット×シュッツの複合唱』の演奏会も10月に行います（※終了しました）。コラボ相手のアンサンブルミリムは、「9人でバッハ」というコンセプトのもとに若手音楽家（新国立劇場合唱団、バッハコレギウムジャパン、東京混声合唱団などのメンバー）が集まったグループで、指揮の根本卓也氏（新国立劇場副指揮者）には定期的に学生を指導して頂いています。彼が普段どのように活動しているのか、その姿も学生に見てもらいたいですね。

専門的に高度な技術を学ぶことも身体知ですが、身につけた音楽知識や技術をどうやって人や自分が幸せになるために考えて行動するか、それが「身体知」と私は考えています。

リベラルアーツとしての音楽

一仰るように、音楽を身体技法としてだけでなく、社会環境や歴史的文脈も踏まえながら、行動に置き換えることが大事ですね。リベラルアーツとして音楽を学んだ学生の中には、どんな方がいらっしゃいますか？

音楽は科学、社会、体育、医学、歴史、外国などあらゆるものと繋がっていて、音楽と結びつけば何でも「〇〇音楽学」となります。そのような学問は他になかなかありません。ですから専門を一つに限定しないこと。昨今の激しい社会的変化の中で、学際的な学び方はますます重要になってきています。たとえば、「数学を学んでいたが、ぱっと環境が変わった

ら、その知識をベースにして他分野に移ることもできる」、そんな学生を育てたいですね。

商学部卒業生で、現在インドの大学院で勉強している人がいます。彼は2年間、声楽アンサンブルと一緒に歌っていました。卒業後は大手商社に4年間勤務していましたが、ある日「将来インドで学校を創るために、ニューデリー大学大学院（社会奉仕科）で学びたい」と、私に推薦状執筆の依頼がきました。シュッツと一緒に歌った人が、インドで学校を創ろうとしているなんて、夢があっていいじゃないですか！これこそまさに「身体知」、彼に推薦状を頼まれて誇らしく思いました。彼は大学やインド政府の奨学金だけでなく、会社同僚や先輩も共感して出資してくれたようです。留学に踏み切ったきっかけは、岡本太郎の「自分の中に毒を持て!」という言葉。芸術家が命をかけて表現したことを感じ取れること、自分が身につけてきた音楽をもってどう生きていくのかを学ぶこと、それがリベラルアーツだと思います。

音楽を深く学んだからこそ、音楽家に対する敬意も

ーベラルアーツで培った価値観や考え方が見事に生きていますね。ところで、音楽を専門的に学んでいる学生もいらっしゃいますか。

大学全体の約2割が一貫校（慶應大付属小・中・高）出身ですが、幼少の頃から楽器を習っている人も多いです。2012年日本音楽コンクール・ヴァイオリン部門優勝の大江馨さんも慶應です。他にもヴァイオリンや古楽器演奏に優れた学生や、音楽学でパリに留学した卒業生もいます。和声や音楽史の授業などもありま



日吉キャンパスは一般教養専任で200名の教授がいる。きわめて自由な校風で、教授陣もさまざま。台湾で薬剤師の国家資格を持っていないが中国語を教えている先生、吉原の江戸文化の研究をしている先生、筋肉の研究をしている先生、「科学者に科学を教えるよりも、将来ビジネスマンになる人に科学を教えたい」と生物学を教えている先生など。「大学で繋げてあげられるのは、先生や生徒との出会い」と佐藤先生。

すし、論文が書ける資料環境も充実しています(三田キャンパス)。音楽学の常勤教員は6名ですが、非常勤の先生方も若手で優れた人が多いですね。

我々教員としてはメソッドをきちんと教え、最後に演奏会まで仕上げていくのが目標です。そして、たとえば3分の音楽を作るのがどれだけ大変か、プロがいかに様々な苦勞を乗り越えて舞台に立っているのか、それを知っている人になってほしいです。それが人生をかけてプロになった人に対するリスペクトでもあるし、意見や批判を述べるにしても根拠と自信を持って言えるでしょう。

何より、音楽文化を育ててくれる人がここから育ってくればいいなと思います。モーツァルトやベートーヴェンも勉強しますが、それ以外の音楽にも凄いものがある。歴史の長いスパンの中で、知識全体を見ていくのが大学のミッションだと考えています。

② 音楽を深く学んだ社会人を育てる ～総合大学音楽学部・音楽専攻

青山学院大学 ～芸術の学びを糧に社会へ

2012年、青山学院大学に誕生した文学部比較芸術学科。音楽、美術、映像演劇の3分野を相互に比較しながら、芸術を総合的に学ぶ。音楽はどのような位置づけで何が学ばれているのか、比較することによってどのような思考が生まれるのか、来年卒業する1期生は何を目指しているのか。音楽専攻の広瀬大介准教授（写真前列中央）、およびゼミ生の皆さんにお話を伺いました。



比較芸術学科とはなにか？

なぜ比較芸術学科が生まれたか

—複数の芸術分野を学際的に学ぶ「比較芸術学科」というのは日本では珍しいですね。どのような経緯で設立されたのでしょうか。

広瀬大介先生：もともと美術や音楽は同じ文学部の史学科に、演劇は英米文学科に属していたのが、2012年に比較芸術学科として新しい学科が発足しました。分野相互の関わり合いがあり、その上で自分の専門を深められると望ましいという共通認識がありました。ですから1年生は必修として、東洋文化も西洋文化もすべて学びます。実技科目として、演劇ではワークショップ、美術ではデッサンなどがありますが、音楽専攻では基本的には音楽理論を学び

ますので演奏の実技を教える授業はありません。現在は美術4人、音楽2人、演劇映像3人の専任教員がいます。美術や演劇映像の先生方も、音楽に詳しい方が多いですね。

—今日見学した楽曲分析のクラスは、学生が自主的に進めていましたね。他にはどのようなテーマを扱っていますか？

楽曲分析は今回で3回目です。これまでの2回でモーツァルトの『交響曲第41番「ジュピター」』K.551、今回はワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』から「前奏曲」と「愛の死」、次回はラヴェルの『ラ・ヴァルス』を勉強します。モーツァルトではソナタ形式を、ワーグナーでは、劇音楽が具体的に何をどのような手法で表現しようとしているのかを考察できればいいと考えています。月替わりのゼミ幹事が、学生発表のときは司会を担当し、飲み会でも幹事をお

コラム 自分でモチーフを探す楽曲分析

この日のゼミ演習では、ワーグナー『トリスタンとイゾルデ』より「前奏曲」と「愛の死」の楽曲分析が行われた。まず楽曲を1回通して聴いた後、ゼミ生全員でアナリーゼ作業へ。事前に配布された総譜とライトモチーフの譜例をもとに、どこにそのモチーフがあるか、どんなモチーフなのかを数小節毎に探ってい

く。断片的に現れたり、拡大・縮小されたり、楽器編成を変えて現れたり、どの楽器とどの楽器がモチーフの受け渡しをしているか等、パズルさながらに見つけていく。学生の一人がリーダー役として司会進行を務め、和気藹々とした雰囲気の中で、出席者全員が積極的に意見を発していたのが印象的である。

願っています (!)。10人ほどなので1年間で全員まわりますね。学生が自主的に進められるように、こちらは90分間でできる限り黙っています。いまの4年生が3年生のときは私が楽曲分析を教えていましたが、今は新しい3年生に4年生が教えてくれているので、私も楽をしています (笑)。

現役生に聞く～比較芸術として音楽をどう学んだか

ー1・2年次に音楽・美術・映像演劇を横断的に学んで気づいたこと、3年次で音楽コースを選んだ理由、学んだことを将来どう生かしたいかなどを、ゼミ生数名にお伺いしました。



音楽と諸芸術の表現の違い

たとえば「やわらかい」という表現一つとっても、絵画では色や描き方で表現し、音楽では和音の響きやテンポなどで表現したり、演劇では言葉の韻で激しさや優しさを表現したりと、様々な表現があることを学びました。オペラなどの舞台芸術を見ていると、どれか一つでは成り立たず、お互いを尊重しあって表現していることが分かり、色々な芸術が繋がっていることを実感しました。(小林佳織さん／大4)

音楽家と様々な芸術家の関わり

シェーンベルグとカンディンスキーなど、芸術家同士の繋がりに興味を持っています。このような発想や気づきがあったのは比較芸術だから。卒論では音楽が成立した背景に宗教や政治があったことを、学際的に研究します。音楽以外では、発達心理、現代思想、記号論、文化経済、文学、美術系科目、インターネットと法などを履修しました。専門的になり過ぎないように、間口を広げることが大事だと思っています。将来はシェーンベルグの研究を極め

てファンを増やしたいです。(高橋葵さん／大4)

音楽と政治の関わり

政治や軍事にも興味があります。旧ソ連などでははっきり物事は言えないが、音楽や芸術を通してそれとなく逃げ道を作りつつ社会体制批判をした歴史があり、そのような芸術の方法を学んで面白いと思いました。芸術は当時の社会や政治体制を反映して、どこかで繋がっていることを4年間で実感しました。ショスタコーヴィチなどソ連の作曲家が好きで、卒論は日本の軍歌です。将来は旅行会社が志望で、旅行を通して音楽や芸術に触れる人を増やしていきたいです。(吉田美香さん／大4)

音楽と映像、音楽と心理の関わり

元々は映像志望で、たとえば音楽が映像とどう繋がっているのか、どういう映像手法やカットの絡み合いがあるのか、音がどういう感情を与えるか、記憶に及ぼす影響などを学びました。卒論はジョン・ウィリアムズとコロンゴルドを軸に、ハリウッド映画音楽の変遷について書く予定です。音楽以外にも幅広く履修し、物事との見方や関わり方を学びました。将来は様々な分野に関われる職種を希望していますが、音楽鑑賞日記ブログは続けていきたいと思います。(新村沙樹さん／大4)

比較芸術を学んだ自負を胸に社会へ

芸術学を学んで糧になった社会人に

高校時代はジュニアオーケストラでチェロを弾いており、大学では音楽の歴史的背景や楽典などの学びを積み重ねてきました。卒論はメンデルスゾーンの『真夏の夜の夢』。演奏会用序曲Op.21は17歳の時に、劇付随音楽Op.61はプロイセン王の勅令でほぼ晩年に書いた作品ですが、この間に何が違って、何

が変わらなかったのかをテーマにしています。実学志向の今のご時勢において、芸術学というニッチな世界を4年間かけてしっかり学んだのは自慢です。それを学んで糧になった社会人がいることが大事だと思っています。(小林拓生さん／大4)

----- **将来は市民楽団で続けたい**

青山学院短大現代教養学科で日本文学を専攻し、「日本の言葉と文化」「日本の歴史と現代社会」「世界から見た日本」、3つの視点から日本を全体的に勉強しました。卒業後に比較芸術学部3年次に編入。社会人になったら、ホルンを買って市民楽団で吹き続けたいですね。(松本真実さん／大4)

----- **将来は音楽人口を増やしたい！**

芸術学部ではなく、文学部に比較芸術学科があることに大きな意味があると思っています。2年次の授業で、社会全体が文芸に密接に反映されていることを学びました。たとえば1830年12月4日にベルリオーズ『幻想交響曲』が初演され、それが標題音楽の始まりと言われていますが、その年にヴィクトール・ユゴーの『エルナニ』事件がありましたし、普仏戦争ではフランス文学がドイツ音楽に影響を与え、ブラームスの『勝利の歌』が書かれました。様々なジャンルで同時に時代が変わっていくので、全ジャンルを学べる環境が大事だと思います。もともと広瀬先生の記事に感銘を受けて青学に入学しました。将来は自分も書くことを通して、クラシック音楽を聴く人口を増やしたいです。(本田裕暉さん／大3)

----- **※有志による活発な広報活動**

比較芸術学科は、学生有志による広報活動も活発で

ある。学会報『HIGEひげ会報』は比較芸術学会委員会が執筆・レイアウトを手がけ、学内で配布している。また比較芸術学会音楽研究会もあり、定例勉強会や会報制作、また日本フィル、読響、藝大フィル公演などに足を運んでいる。



※経験した楽器、履修した科目の多様さ！

7名がこれまでに経験した楽器：ピアノ、エレクトーン、歌、オペラ、ベース、合唱、トランペット、吹奏楽、和太鼓、声楽、クラリネット、指揮、ドラム、チェロ、打楽器、ホルン、ヴァイオリン！

音楽以外の科目：発達心理学、現代思想、記号論、文化経済、物理、法律、文学、美術、芸術と法律、インターネットと法、医療社会学、イスラム史、ギリシア哲学史、ラテン語、等々。

フェリス女学院大学 ～音楽が心にある豊かさ

フェリス女学院大学では1989年に音楽学部が短大から4年制となった。演奏学科は当初から変わらないが、10年前に楽理学科から音楽芸術学科へ転身して今に至る。総合大学の中で音楽学部の特色を生かし、より自由な学びができるようになったという。カリキュラムは、学生が主体性を持って創造・実践することに重きが置かれている印象だ。今回は、黒川浩先生（演奏学科）、瀬藤康嗣先生（音楽芸術学科）にお話を伺った。



音楽が核にある豊かな学びを ～演奏学科

—黒川先生は演奏学科の学生さんとのどのように関わっていらっしゃいますか？また総合大学に音楽があることをどう捉えていますか？

黒川浩先生：フェリスには大学全体として「音楽が心にあることの幸せ」という雰囲気がありますね。演奏学科は1学年30名くらいで（ピアノ科はうち約10名）、皆仲がいいです。私達の学生時代は競争主義でしたが、ドイツ留学時に師事した独デトモルトのシュヌア先生に、それは間違いだということを学びました。日本に帰ったら本当に優しい先生になりなさい、生徒の良い所を見て伸ばしてあげるようにと。シュヌア先生は、たとえ失敗しても「芸術はもっと広くて深いものだから気にするな」と全てを受け入れて下さり、自分らしさを大切にしていいるのだと教えて頂きました。

フェリスの学生には、大らかに勉強して、幅広く良い仲間をつくり、自分の行く道を見つける、そして「も

てなしの精神」を身につけて社会に出てほしいと思っています。

アメリカの総合大学にも音楽がありますね。10年前米フィラデルフィア州のニューマン



大学にて、ダブルメジャーで音楽も学んでいる看護学科と犯罪捜査科の前で、講義とコンサートをさせて頂きました。その時感じたのは、どの学科でも優秀な学生ほど演奏がうまいこと！「心に音楽があること、音楽を享受できる心があるということは、ステータスが一つ上だと思います」と、ある学生が言っていました。そのような価値観で音楽を学んでいるのです。日本でも教養的な音楽の学びの時代が来るのではないかと感じています。

創造&実践！全ゼミでコンサート制作実習～音楽芸術学科

社会実践コミュニケーションとは？

—音楽芸術学科は、幅広いリベラルアーツ型音楽教育を掲げていらっしゃいますね。7段階の専門科目カリキュラム(※1)がありますが、中でも「社会実践コミュニケーション」、すなわち音楽と社会との結びつきを学ぶ科目群が特徴的ですね。

瀬藤先生：はい、実践を伴うワークショップが多いですね。たとえば声楽の場合、これまでは身体技法としての歌が学びの中心でしたが、今は自分で録音してオーディションに送る、自分でホームページを創る、マイクを使用する場合は現場で難なくマイクスタンドを扱える、ナレーションや朗読ができる、等々といったスキルも必要です。関連領域を学んでいた方が卒業後の活動にプラスになる

※1「ミュージシャンシップを養う」「キリスト教音楽を体験」「ミュージシャンシップを高める」「音楽の背景を探る」「専門を深める」「専門を極める」

だろうと、実践的な科目を用意しています。

音楽には様々な関わり方があるので、まずは広く浅く触れて、興味を持ったなら深く学んでもらうことを想定しています。たとえば自分でコンピュータを使って映像や音楽を作る学生も多いですね。またK-POPの世界進出に興味を持っている学生や、J-POPの事務所でバイトをして将来のビジネスモデルについて研究したり、中国語を勉強してC-POPについて（なぜ中国のみで世界では聴かれていないのか）追究したり、インターネットによって音楽ビジネスがどう変化していくのか、などの研究例もありますね。

コンサート制作実習を通して学ぶ

—幅広く学ぶ過程で、独自の視点が生まれてきますね。ゼミにはどのような特徴がありますか？

ほとんどのゼミでコンサート活動や企画に関わっています。私の「音とメディアテクノロジー・ゼミ」ではCDアルバムを制作し、自作曲をプロのミュージシャンと一緒に演奏するライブを行っています。また「共演コミュニケーション・ゼミ」（立神粧子先生）では、アウトリーチ活動として幼稚園や病院などで出張演奏を行い、コンサートマネジメントのすべてを学びます。また自作曲発表やミュージカル制作、フリーペーパー制作などを手がけているゼミもあります（※2）。

またゼミではありませんが、『戦争と音楽～闇から光へ』という切り口でのコンサート企画もありました。サントリーホール主催『レインボウ21』の一環で、フェリスが採択されたのは2回目です。1回目は『ピアノ七変化～内部奏法とプリペアド・ピアノ』（2011年）というタイトルでした。

コンサート創りはチームプレーで、マネジメントや予算管理もしなくてはなりませんし、場合によっては映像技術や著作権処理、広告宣伝やメディア取材対応なども必要です。音楽の道に進むかどうかに関係な

く、これは世の中全てに関わること。将来必ず役に立つから、そこからしっかり学び取り、就職活動でもアピールするようにとっています。

幅広く学んで生かす

～他学部とカリキュラムシェアも

—音楽芸術学科生はどのようなバックグラウンドをお持ちでしょうか。また学部間交流が活発な印象ですが、他学部科目を履修する音楽学部生も多いでしょうか。



音楽芸術学科の学生は様々ですね。子どもの頃からピアノや楽器を習ったり、ミュージカルの舞台に立っていた子もいれば、好きだけど未経験の学生もいます。芸術家としてキャリアを築いていくのは早い段階から活動をしていた人が多いですが、その素養がない場合は、自分の好きなことを大学で学び、一般就職を選ぶことが多いです（就職率96%）。音楽の道に進むのは3割ですが、ライフワークとして音楽が傍らにあることで人生が豊かになるでしょう。

またフェリス全体の特徴として、他学部開放科目が多くあります。音楽芸術学科は、半分以上の単位が他学部科目でも卒業できるカリキュラム構成にしています（※3）。また他学部から音楽学部科目を受講する学生も多く、たとえばバレエや合唱などは人気ですね。私が担当しているアートマネジメントや映画音楽の授業も、100人中3割は他学部生です。

社会でこそ生かされる教養の学び

—では、音楽の学びは実社会でどう生かされているのでしょうか。一般就職した卒業生が、企業でどのように活躍されているのかも興味深いところです。

2011年に『ピアノ七変化』企画を立てた石塚夕夏さんは、オールアバウト株式会社（生活情報総合サイトAll

※2 ゼミは、作曲・編曲、ヴォーカル・コミュニケーション、音楽ジャーナリズム、音環境デザイン、ポピュラー音楽、共演コミュニケーション、音とメディアテクノロジーの7つ。

※3 卒業に要する124単位中、音楽芸術学科は72単位、演奏学科は66単位までが他学部科目でも可。

About運営)に入社し、間もなくその活躍が評価され、全社のMVPにノミネートされたそうです。学部時代は音楽芸術学科科目を幅広く学びながら、ピアノやジャンベ(アフリカの太鼓)をライブで演奏したり、パーカッションもできました。

またAKIRAというソニー・ミュージックからリリースしている歌手の卒業生がいるのですが、彼女曰く

「一番役に立ったのは、哲学やキリスト教の授業」
とのこと。人が長い時間をかけて考えてきたこと、それを学べたのが歌詞を書く時にも役立っているそうです。

音楽はテクニックだけではなく、どのような価値観を持つのかも大切です。これから音楽教育は総合大学でもやるべきだと思っています。

コラム 実社会で活躍する卒業生が大学時代に打ち込んだものは？

石塚夕夏さん(株式会社オールアバウト勤務)

フェリス女学院大学では音楽基礎教養や演奏技術の授業のほか、音楽芸術学科ならではの授業として、即興演奏ワークショップ、音楽ジャーナリズム、ポピュラーミュージック理論、アートマネジメントなどを履修。さらに他大学授業として、イノベーションと起業(横浜国立大学博士課程前期)を学びました。

授業以外で最も魅せられたのはコンサート制作です。きっかけは2年次に受講した三宅榛名先生の作曲クラスで、クラス全員の作品を披露するためにコンサートを企画・実施したこと。3年次には現代音楽の作品を作りながら、作曲ゼミメンバーでコンサートを開催したり、ゼミ以外で手掛けた『ピアノ七変化～内部

奏法とプリペアド・ピアノ～』では、ピアノから様々な音が出ることを示すために、内部カメラを設置して大画面に映す演出なども取り入れました。

就職活動の面接では、徹夜で企画書を作り「会社に入ったらこんなことをしたいです!」と伝えたことを思い出します。自社ならではの魅力的なコンテンツをつくるために、社員の意見を取り入れながらゼロから制作する過程は、学生時代のコンサート制作と似ている部分もあります。学生時代に経験したことや学んだことのすべてが、成長の糧になっていると実感しています。

金城学院大学 ～3タイプの音楽家像を想定して

金城学院大学は五千人規模の総合大学である。教育スローガンの「強く、優しく。」を象徴するような文学部音楽芸術学科は、美しい校舎とホールで、現在約180名（1学年約45名）が学んでいる。前身は芸術・芸術療法学科であったが、演奏を専門的に勉強したいという学生が増え、次第に音楽芸術の専門へシフトし新学科設立に結びついたと言う。将来のキャリアを見据えた実践的な音楽専門科目に、総合大学ならではの教養科目を組み合わせたカリキュラムのもと、学生たちはどのように学んでいるのだろうか。新学科設立の特徴については馬場マサヨ先生に、地域指導者連携については長谷川淳先生にお話を伺った。



2014年8月にリリーホール完成（200人収容）。音響は国内トップクラス。このホールでは試験や公開講座、公開レッスン等の授業の他に、学外に向けての演奏会も開かれる。

三タイプの音楽家像を想定して

<演奏家育成プログラム>

～1人を4人で指導するユニークな授業

一文学部音楽芸術学科が新設された経緯をお伺いできますか。
また<演奏家育成プログラム><ピアノ指導者育成プログラム><音楽教員育成プログラム>の3つのプログラムがありますが、それぞれどのような特徴がありますか？

馬場マサヨ先生：3年前まで人間科学部芸術・芸術療法学科だったのですが、音楽療法を勉強しながらも、演奏をもっと勉強したいという学生が増えてきました。2013年、文学部に音楽芸術学科が誕生しましたが、文学部でも、語学だけでなく外国の文化も含めて勉強させる方向にさらにシフトするために、音楽芸術学科設立を機に「文学部リベラルアーツ科目群」をはじめカリキュラムの改正を行いました。

3つのコースの特徴ですが、まず<演奏家育成プログラム>には1人の学生を3人の専任教員が指導する「ピアニスト育成特別レッスン」があります。指揮者の小松長生先生、ピアノの長谷川淳先生・私の3人が、それぞれ立場と特色を生かした指導をしています（最大8名・最長2年）。普段のピアノレッスン指導とは別の科目ですので、長谷川先生や私の門下でない場合、学生は4人の先生から個人指導を受けるということになります。「ピアノアンサンブル」では、セント

ラル愛知交響楽団のコンサートマスターの方に、週1回2コマ（1コマ90分）指導頂いています。

またチェリストの方にもお越しいただき、ヴァイオリンとのデュオ、

ピアノトリオ等の室内楽の指導を受けられる科目となっています。プロの方と共演し指導を受けるというユニークな授業です。確実に教育効果が出ていると思います（その他、学生同士のアンサンブルを先生が指導する「室内アンサンブル」がある）。また私が担当する「ピアニストのための脱力法」はピアノの奏法に問題を抱えた学生を対象にしたもので、座り方や手の使い方などに特化した指導をしています。

<ピアノ指導者育成プログラム>

～地域指導者とタイアップして実習

長谷川淳先生：やはり、長く学んだピアノを生かしたい、将来ピアノの指導者になりたいという学生が多いです。<ピアノ指導者育成プログラム>の中の「ピアノ教室レッスン実習」という科目では、地域の優れた指導者や音楽教室とタイアップして、在学中から実習生としてピアノ指導の経験を積み、卒業後すぐに現場に行けるようにしています（全8回32時間、現在12



馬場マサヨ先生
『ピアニストのための脱力法』では、ルービンシュタインも学んだというフェルデンクライス・メソッド等も体験してもらいます



長谷川淳先生×堀井ゆりかさん（大3）
ブラームスの協奏曲第2番、第2楽章は初めてのレッスン。音楽のイメージを明確に持っている堀井さんに対し、長谷川先生の論理的でテンポの良い指導が進む。定期演奏会で「ラ・ヴァルス」を熟演し、コンチェルト出演機会を得たそうだ。現在の履修配分は、音楽6：その他4くらい。「リベラルアーツ科目群では音楽と美術、音楽と文学の繋がりが勉強できます。美術鑑賞授業でボストン美術館に行った時、ドビュッシー『海』初版表紙になった浮世絵（富嶽三十六景より）の原画を見て驚きました。これから自分でも美術館に足を運んでみようと思います」。

教室と連携）。最初の6回は教室のレッスンを見学、最後の2回は教室の先生のご指導のもと、学生自らが実際に教室の生徒さんに教える機会を作らせてもらっています。生徒さんのレベルは様々で、シニア指導やグループレッスンも入っています。また今年から開始した授業「ピアノメソッド概論」ではバスティンメソッドの藤原亜津子先生をゲストとして呼び出す予定です。他にヤマハ、カワイグレード取得のための科目「ピアノ応用演奏」や、「リトミック」なども学生の人気の高い科目です。

また小松先生には学生がオーケストラと共演する機会もプロデュースして頂いています。学内の1次、2次試験を突破して定期演奏会に出演した学生の中から、さらに選抜された20名ほどが、セントラル愛知交響楽団と共演する「ガラコンサート」は今年で5回

指揮者が学生演奏会プロデュース&オケとの連携

—2年次必修科目に「芸術学」という授業がありますね。

馬場先生：指揮者で本学専任教員の小松長生先生が担当で、教科書は使わず独自の方法で教えられています。「音楽家は哲学を学ぶべし」といつも仰っていますね。特に西洋音楽では、哲学を知らないところを表現しているか理解できないところがあります。あと、「感動」も大事にされていますね。学問として重要なことを伝えても、「感動」という体験をしなければ本物がわからないと。学科の先生方は何方も、音楽の全体をよく知っていて、かつ心から音楽が好きな方たちです。

また小松先生には学生がオーケストラと共演する機会もプロデュースして頂いています。学内の1次、2次試験を突破して定期演奏会に出演した学生の中から、さらに選抜された20名ほどが、セントラル愛知交響楽団と共演する「ガラコンサート」は今年で5回

目になります。小松先生（同楽団名誉指揮者）がコンサートをプロデュースする立場から出演者を選び、全体プログラムを考慮してコンチェルトの曲目を決定します。また先生の指導のもとで、学生自身が曲目解説を書きます。

文学部だからこその幅広さも

幅広く学ぶ音楽生、音楽も学ぶ他学科学生～文学部リベラルアーツ

—貴学ではリベラルアーツ型の教育が特徴ですね。文学部リベラルアーツ科目群についても教えて下さい。

大学ではピアノだけでなく色々な勉強をしたい、音楽の歴史的背景や文化など芸術全体を勉強したい。そう望んでいる学生が実は多いのではないかと感じています。オープンキャンパスや入試の面接でも、教養科目群に目を輝かせて入学に期待を寄せる高校生が多く、嬉しく思っています。

音楽芸術学部の基礎科目としては「芸術学」「西洋音楽史」「音楽理論」など、また文学部リベラルアーツ科目群には「音楽と文学」「ヨーロッパの文化と芸術」「美術鑑賞」などがあります。美術は音楽家にとって必須の教養ですし、「ドイツ文化入門」や「フランス文化入門」はそれぞれ専門の先生が担当されるので、音楽芸術学科の学生も喜んで学んでいますね。

一方、他学科の学生が履修できる音楽科目もいくつかあります。「音楽鑑賞」では、オーケストラ、オペラ、ミュージカル、ジャズ、日本音楽まで幅広く扱うので、どの学科の学生も好んで履修しています。小松先生によれば、音楽専攻ではない学生の中にも、着眼点の素晴らしいレポートを書く学生がいるそうです。「音楽と文学」は第九の歌詞と音楽がどうリンクしているか等、また「日本と世界のクラシック」は、日本文学や美術の古典作品などをオムニバス形式

で学ぶ授業です。

社会で音楽の力を役立てるために

徹底したキャリア教育～音楽を通じた学びが一般就職でも強みに

―地域指導者と連携した<ピアノ指導者育成プログラム>や、セントラル愛知交響楽団との「ガラコンサート」など、社会と結びついたプログラムも色々ありますね。将来のキャリアについてはどのようにご指導されていますか。

共通教育科目一つに、「キャリア開発」という科目があり、1年生次から、自分は卒業後どの道に進むべきかを考える場が用意されています。企業トップによる講演や、お化粧品から身だしなみまでの指導もあり、授業とは別に、キャリア支援センターで個人面談を受けることもできます。卒業後にピアノや音楽の道だけでなく、一般企業に就職できるのも本学の強みでしょう（就職率は県内トップ層）。

水に合ったところに行って、花が開くこともあります。ピアノで頑張ってきた卒業生の一人は、4年次になり、教職の道が本当に自分に合っているのか悩んでしまい、キャリア支援センターに相談に行ったのですが、そこでの担当者が「彼女は目の輝きがすごい。一般就職もいいのでは」と提案してくれました。最初はとても悩んでいましたが、「ピアノで頑張ってきた自分は、誰より打たれ強い自信がある」と面接でアピールできたようで、大手銀行就職が決まりました。今彼女は現場で生き生きと仕事をしていると聞いています。

―先生方の眼がとても優しいですね。「ピアニスト育成特別レッスン」など、複数の目で一人一人の学生さんをご覧になっているのが伝わってきます。

全教員が全学生を指導することが学科のモットーです。長谷川先生と私は時々学生の指導を交換しますし、会議でも学生たちのことをいつも話しています。ピアノに限らず、声楽や管楽器の先生方とも話しているのも学生のことで。だから自分の指導生がピアノにつまずいているなと感じるときに、他の科目を指導する教員から「彼女はこんなに良いレポートを書いている」と聞いて安心できます。転コースも容易にできますので、それぞれの学生が一番幸せになる道を選んでほしいと思っています。

―音楽やピアノを学んだ経験は、一般社会でどのように役立っていると思われますか？

ピアノだけでなく声楽や管楽器も同じですが、訓練を積み重ねて一つのことをやり遂げる力があること。舞台に立つのは不安ですから、その不安を乗り越える勇気と強さがあります。また芸術療法学科の頃からですが、「人のために弾きたい」というボランティア精神もありますね。また他学科の先生に「先生の言葉を素直に聞き入れるのは音楽芸術の特性かもしれない」とよく言われます。企業に入った時に、まずは「はい」と上司や同僚のことを素直に聞けるということは大きな資質になると思います。どの道を選んでも、音楽や演奏を通じて得られた体験が生きてくるのではないかと思います。

※<音楽教員育成プログラム>は中学や高校の教員を目指す人のためのプログラム。人前で自分を表現することを演劇から学ぶ「エクスペリメンテーション・トレーニング」や、中学や高校の校歌や身近な曲を編曲するときに役立つ方法を学ぶ「編曲法」、合唱や吹奏楽をどう指導するかを学ぶ「合唱指導法」「吹奏楽指導法」など実践的な授業が多い。<演奏家育成プログラム><ピアノ指導者育成プログラム><音楽教員育成プログラム>の3つのプログラムは複数履修可。

※馬場マサヨ先生「ピアニストはインナーマッスルが大事です。多くの学生が不必要なところに力を入れて演奏し、肩や腕の痛みを感じています。まずは不必要な力とは何か、またその部分を緩めることがポイントです。また、日本人と外国人は伸筋と屈筋の最初に発動する方向が反対で、それは日常の所作の違いにも表れています。西洋楽器であるピアノを弾くための合理的な動きを習得することによって、痛みもなくなりピアノの技術が格段に上がります。そして何より音の質が美しく変化します。」と馬場先生。※「『目からウロコ』のピアノ奏法 ～オクターブ・連打・トリル・重音も即克服～」(ヤマハミュージックメディア刊)。

※<音楽教員育成プログラム>は中学や高校の教員を目指す人のためのプログラム。人前で自分を表現することを演劇から学ぶ「エクスペリメンテーション・トレーニング」や、中学や高校の校歌や身近な曲を編曲するときに役立つ方法を学ぶ「編曲法」、合唱や吹奏楽をどう指導するかを学ぶ「合唱指導法」「吹奏楽指導法」など実践的な授業が多い。<演奏家育成プログラム><ピアノ指導者育成プログラム><音楽教員育成プログラム>の3つのプログラムは複数履修可。

③ 音楽の可能性をさらに掘り下げて～音楽大学

東京藝術大学 ～スーパーグローバル大学創成支援認定校に

日本の高等教育機関の国際競争力を高めるため、昨年よりスーパーグローバル大学創成支援事業が始まった。採択された全国37大学中、音楽・芸術関連では唯一の指定校となった東京藝術大学（グローバル牽引型）。教育方針やカリキュラムに変化はあるのだろうか。同大理事・ピアノ科教授の渡辺健二先生にお話を伺った。



日本発音楽家として、海外に出る意義とは

よりグローバルなアーティストを目指して

—東京藝大は芸術系大学では唯一、スーパーグローバル大学創成支援校に採択されました。教育方針やカリキュラム等には変化がありますでしょうか。

スーパーグローバル大学指定校として、世界をリードするような芸術家・研究者を育成することが第一の目的です。藝大は創立当初から世界と関係を持ち、グローバルではありましたので、何かが変わるというより、強化される感じですね。世界第一線のアーティストを招聘し、早い段階から本場の教育（特に実技レッスン）に触れられるようにします。海外からの招聘教授をさらに増やして指導体制を2倍にしますので、学生にとっての刺激は倍増するということです。

ピアノ科の招聘教授陣は、今年はジャック・ルヴィエ、ミシェル・ベロフ、ケメネシュ・アンドラーシュの三名で、11月から順次来日し、約1～3週間滞在して、我々と共同で指導して頂きます。

（期間中には、教員とピアノ科や他科の招聘教授とのジョイントコンサートも開催）

海外に音楽家・音源を積極的に発信

—「世界で活躍したい」という学生の意識は、以前より高まって

いるとお感じになりますか？

はい。スーパーグローバルの動きが大学全体に出てきますので、より強く意識するようになりましたね。今までは大学院を休学して留学することが多かったのですが、それだけでなく、学部時代に一度留学して、卒業後に再び海外に行くという学生も増えてきています。

また国際企画課では昨年から、日本人を海外へ送り出すための企画や、英語プレゼンテーション講座・先輩による体験談・留学相談にも応じています。英語プレゼンテーション講座は大学院生対象で、今年7月には"Introduce Yourself as an Artist"をテーマに実施しました。

さらに、演奏音源も積極的に世界へ発信していきたいと考えています。アップルやアマゾン等でもクラシック分野の音源がダウンロード可能になりますし、恐らく来年からクラシック分野専用チャンネルも登場するので、藝大のチャンネル設置を計画中です。

日本人も長年、クラシック音楽の学びや経験を積み重ねてきました。西洋で生まれ育った若者と同じではないとしても、日本人としての、韓国人としての、中国人としての、ショパンやベートーヴェンを打ち出してもいいのではないかと思います。ヨーロッパの

※藝大基金（ASAP "Arts Study Abroad Program"）が支援。これはスーパーグローバルをきっかけに新設された奨学金で、教員が企画し、学生が主体的に実行する海外での芸術研修にかかわる。全学部・大学院が対象で、単位認定も有り。事前調査及び実績に基づき、可能な範囲の奨学金を支給する。

音楽家からも同じような意見を多く聞きます。

海外大学との共同学位も

—積極的に海外に出て演奏交流すること、発信することは大事になりますね。ところで美術学部では共同学位などが進んでいるようですが、音楽学部はいかがでしょう。

2017年秋になるとと思いますが、リスト音楽院大学院と藝大大学院の共同学位をピアノ科から始める予定です。(藝大生は)1年目は藝大で学び、2年目はリスト音楽院へ留学する形になります。これは日本の音楽大学では初めての試みです。

美術研究科にはグローバルアート共同カリキュラムがありまして、海外から学生10~20人が来日し、藝大生と共同でリサーチや物創りを行い、越後妻有や高松栗林公園など広い範囲でソーシャル・プラクティスを展開しています。音楽ではそのような形は難しいですが、一昨年弦学科生数名がジュネーブ音楽院で合同オーケストラに参加したように、海外から学生がもっと来るようになれば新しい展開ができそうです。附属高校も今年は台湾での演奏会を行いました。今後積極的に海外に出るなど、計画はありますので、実現に向けて取り組んでいきたいですね。

—現在、日本で学ぶ外国人留学生はどのくらいいらっしゃいますか？

音楽・美術合わせて160名の外国人留学生がいます。ピアノ科は2名で、私は台湾からの留学生を指導しています。明るく大らかな演奏をする学生で、日本語も半年ほどで習得し、他の門下生ともよく交流しています。藝大の寮に入る留学生も多く(国際交流会館や2014年新設の藝心寮)、地域の方々が「皆で外国人留学生をお世話しよう」と積極的に交流して下さっています。お祭りに呼んで頂いたり、彼らも絵を描いたり、歌やピアノ等の楽器を演奏したり、とても盛り上がっているようですね。

才能の早期発掘

—スーパーグローバルとは直接関係ありませんが、飛び入学も受け入れるようになりましたね。

才能を見極めるのは難しいですが、ハードルを高くして選抜します。124単位という卒業要件は一般学生と変わらないですが、カリキュラムはかなり自由に組めるようにする予定です。今後、特に優秀な学生に対しても同じように対応するか検討中です。

専門をきっちり学んだ上で、幅広い教養を

芸術家も基礎教養が大事

—昨今は音楽に限らず、あらゆる分野で教養教育の重要性が高まっています。藝大では才能を最大限に伸ばす環境作りに加えて、この点についてどのように取り組まれていますか？

やはり専門をきちんと学ぶと同時に、幅広い教養をもつことが大事です。まずは様々な分野を広く浅く知ること、そこから興味を持てばまた各自深めてもらうのが望ましいと考えています。

昨年度、芸術大学における教養教育の在り方について提言を行いました。これは、「歴史を識る」「社会を識る」「コミュニケーション力を身につける」「自然を識る」「科学的知識を識る」「他分野の芸術を識る」の6カテゴリから成り立っています。私がセンター長を務める教養教育センターでは、これをベースとしてどう現実的に科目と組み合わせていくか、現在検討中です。また本学だけでなく、芸術・音楽大学全般を対象に、各大学の方針や個性に沿った形で応用できるよう記載してあります。

教養は芸術そのものを深めるためにも必要ですし、キャリアアップしていくと様々な分野の方と話す機会も増えますので、芸術家・音楽家として魅力ある人間であってほしいです。

※藝大ミュージックアーカイブ(<http://arcmusic.geidai.ac.jp/>)では、定期演奏会、モーニングコンサート、海外提携校交流演奏会、大学祭公演などの記録音源・映像などを配信。また学内ではSPコレクションを使ったコンサート(<http://geidailib.tumblr.com/post/119428185178/sp>)、初めてのコンサートを再現した演奏会(<http://www.geidai.ac.jp/container/sogakudo/25352.html>)なども開催されている。

東京音楽大学 ～演奏と作曲を同時に学ぶ

昨今、世界各国の音楽院で作曲、即興、指揮等を学ぶピアノ科学生が増えつつあり、国際コンクールでお目にかかることも増えた。日本でもその動きがある。東京音楽大学では昨年度、ピアノ科に「コンポーザー＝ピアニストコース」「ピアノ創作コース」が新設された。配分は異なるが、いずれも演奏と作曲を学ぶコースである。この度、「コンポーザー＝ピアニストコース」新設に携わった播本枝末子先生、同コース教員の土田英介先生、「ピアノ創作コース」に関わった武田真理先生、梶場富美子先生にお話をお伺いした。

コンポーザー＝ピアニストコース

ーピアノ創作コースを新設された経緯、またカリキュラムについて教えて頂けますか。

播本枝末子先生：作曲実技、ピアノ演奏ともにプロフェッショナルを目指すコースです。4年間のピアノ実技のほか、作曲実技と作曲技法という授業があるのが特徴で、ピアノ科に所属するコンポーザー＝ピアニストとして活躍する教員が作曲の指導にあたります。

このコースの目的は作曲家としても通用し、かつ自作のピアノ作品、ピアノを含む室内楽作品を自ら高度に演奏できる音楽家を育成することです。入学時の作曲の試験では、基礎力の完成と高度な次元での自発的な音楽性が求められます。現在このコースに在籍している学生は2年生1名のみです。

構想は15年ほど前から～コース設立に至る流れ

ピアニストであり作曲家でもあったラフマニノフやバルトーク、プロコフィエフ達の活躍した年代は、まだ半世紀ほど前のことです。長い西洋音楽の歴史から考えれば、むしろ作曲家と演奏家が分離してしまった現在の方が不自然、と言えるかもしれません。

私がドイツに留学した時、もう43年前の話になりますが、本場の音楽文化と教育は日本のそれとは根

本的に異なっていることを痛感させられました。それは音楽の分野だけでなく、同じ頃にドイツに留学した芸大の

同期の建築家も 同じ様な感想を持っていました。まだヨーロッパは遠い憧れの地でもあり、今とは隔世の感ですね。5年半後に帰国した時、日本の音楽教育をなんとかしなければならぬ!と強く思い、それが福田靖子先生の思いとも繋がっていました。私はドイツに行く前、恩師の故田村宏先生のお引き合わせで既に福田先生と出会っていました。現在のピティナの前身である東京音楽研究会で指導のお手伝いをし、留学中も交流が続いていたので、帰国後すぐにピティナ設立時の活動をし、同時に音楽大学の教育改善にも情熱を注ぎました。両者の活動は日本全体の音楽教育を考えた時、切り離せないものでしたから。当時とは何か使命感のような物に突き動かされていました。その気持ちの上でも福田先生と繋がっていたように思います。

東京音大ピアノ科主任を務めた頃には、既にコンポーザー＝ピアニストコースの構想を持っていました。そこでまず2000年にピアノ科教員として土田英介先生にいらして頂きました。土田先生とは既に交流があり、彼の作曲家としてまたピアニストとしての秀でた能力を是非ピアノ科の教育に生かして頂きたいと思ったからです(※1)。その後2002年に大学



後列右より) 土田英介先生、播本枝末子先生、篠田昌伸先生、(前) 松坂拓人さん

※1 2013年にはピティナ・クロスギビングにより、土田英介氏作品4曲を浄書、個展にて演奏(『ラプソディ～ヴァイオリンとピアノのための～』『ピアノのためのファンタジー第1番～3番』)。また2010年ピティナ・ピアノフェスティバル『ハイドンとモーツァルト』では卓越した楽曲分析を披露。

院にピアノ伴奏コースを作り、そこに作曲科を卒業してピアニストとしても活躍している人材を集めて行きました(※2)。こうして現在の大学院の伴奏コースとコンポーザー＝ピアニストコースの母体が作られて行きました。

現在の大学院の伴奏コースにはこれまでに100名以上の修了生がいますが、作曲家としての視点を生かしたレッスンや和声の授業(伴奏基礎演習)は東京音大独自の特徴ある教育であり、これに魅力を感じて他大学の学生や作曲科の学生、既に社会で活躍している伴奏ピアニストも入ってくるようになりました。

学部課程に「コンポーザー＝ピアニストコース」が設立されたのは2014年。演奏と作曲を同時に学ぶことへの理解と関心が高まり、ようやく機が熟して来たようです。ここまで来るのにほぼ15年かかりました。

ピアニストが作曲を学ぶ効果とは？

作品の意図を理解せずに演奏が成り立たないのは当然ですが、しかしこの当然が当然ではないことが今でも良くあるものです。私の門下にはピアノ科志望から作曲科に変更した生徒や同時に両方を学んだ生徒達もいますが、彼らの成長を見てみると、作曲を学ぶことにより明らかに作品の理解が早くなり、練習時間が短縮され、表現が多様になります。暗譜における心配も激減し、譜面から即、自然に音に変換することが出来る。ピアノだけ学んで弾いている人とは、ピアノ演奏時に使っている脳の部位とバランスが違うように感じます。それについては、脳科学者の古屋晋一先生に研究をお願いしています。

私の理想としては、いつかコンポーザー＝ピアニストという呼称さえ不要になり、多様な能力を持ち、世界に向けて発信できる魅力的な音楽家が沢山育成されることです。

※2 現在は学部3年次からオプションで伴奏授業を履修できる。要オーディション。

※3 講師の篠田昌伸先生も、2005年度日本音楽コンクール作曲部門第1位の実績と、ピアニストとして優れた実力を持つ。

実際の授業は？～土田英介先生より

土田英介先生：コンポーザー＝ピアニストコースの入学試験には、ピアノ実技と、5時間の作曲実技、和声の試験が課せられます。そして入学後は、ピアノ実技のレッスン以外に極めて高いレベルの和声、対位法、オーケストレーション、自己の創造性を追求した作曲に専念する学習を行います。現在、二年生の作曲実技は篠田昌伸講師(※3)、作曲技法は私、土田が担当して徹底した作曲の個人教育を行っています。これからコンポーザー＝ピアニストコースを目指したい、という方には古典に根差した音楽を創る喜びを知り、高校生の時から和声など作曲の基礎となるものをしっかり学んで頂ければ、と思います。

多くの優秀なスタッフが、共に新しい時代を築くべく、多くの皆さんの挑戦を期待しています。

ピアノ創作コース

「ピアノ創作コース」とは？

ーピアノ創作コースを新設された経緯、またカリキュラムについて教えてください。

武田真理先生：最近、演奏と作曲を両方学べることに興味を持つ学生が増えていると感じています。学生のニーズとしては、自在にアレンジできるようにになりたい、曲を創りたい、



武田真理先生

い、ジャズで即興演奏したい、ヤマハの講師グレード試験を受けたい、など様々です。今まででもできる学生はいましたが、より体系的に学ぶためのカリキュラムになっています。作曲・編曲ができれば、演奏・指導現場でも幅広く対応することができます。

ピアノ創作コース生は現在2年生に7名、1年生に10名です。ピアノコース生と同じ実技科目をこなした上

で、作曲科教員（嵯場富美子先生、藤原豊先生、喜久邦博先生）による個人レッスン30分と和声20分の授業を毎週受けます。ですから、ピアノ演奏+αと考えて頂ければよいでしょう。練習もしなくてはなりませんので皆とても忙しそうですが、コンポーザー＝ピアニストコースの学生（1名）とも仲良く学んでいるようです。付属高校にも同時に新設され、高校1年生2名が在籍しています。

—入学試験ではどのような創作課題があるのでしょうか。

武田先生：入学試験は自由創作の課題がありますが、それほど難易度を高く設定せず、入学後に学びを積み重ねていく方針です。演奏実技課題としては、ピアノ創作コースのみの志望者は課題曲を1曲少なくしてありますが、ピアノコース併願の場合は同じ課題です。応募者も多く、今年度ピアノ・創作コース受験生の中で、半分以上がピアノコースを第2志望としています。（第1志望を作曲、第2志望をピアノ・創作コースで受験することもできる。）

—初年度から人気が高いことが伺えます。入学後にコース転向することはできますか？

武田先生：曲を書くというのは大変な作業ですし、やはり演奏に絞りたいという場合はピアノのみに転向することもできます（試験無し）。逆に、ピアノコース生で創作コースに転向希望する場合は、1年間創作を勉強した学生と同じような課題をこなさなくてはなりません。実際に転向する人がいるかは未知数ですが、可能性としてはあります。

—嵯場先生にお伺いします。まだ後期の最中ではありますが、作品創作はどのように進んでいますでしょうか。

嵯場富美子先生：週一回の創作レッスン（個人）と和声の授業（4人で80分1コマ）があります。創作のレッスンでは、個人差があるので、何が書きたいかを一人一人相談して決めていきます。例えば、自由な形式で書きたい、変奏の方法やソナタ形式の勉強をして変奏曲やソナタを書きたい、ピアノ独奏曲ばかりでなくヴァイオリンとの二重奏を書いてみたい等々、学生の実力

を考えながら、できる範囲で挑戦させています。1年に1曲の提出が義務付けられており、今年5月には前年度提出曲での演奏会を開催しました。

また、コードネームの勉強や、ヤマハのグレード試験の準備をしたい学生にも対応したレッスンをしており、和声の授業も生徒一人一人の進度に合わせ個人指導の形を取っており、音楽高校作曲科出身の生徒には現在対位法を教えています。

—作曲を同時に学ぶことによって、ピアノ演奏にはどのような影響や変化が見られますか。

嵯場先生：演奏している曲が以前より理解できるようになったという声は聞こえてきますので、分析能力が身につけてきていると考えております。また、自分自身が楽譜を書き、作曲することによって、書かれている音符に対してより注意を払い、作曲家が意図したことを汲み取ろうとする姿勢や理解する力を習得することができると思っています。



嵯場先生&ピアノ創作コース生の皆さん

昭和音楽大学 ～博士課程&短大社会人コース

昭和音大では、芸術文化の未来を担う人材を育てるため、2014年に博士後期課程（以下「博士課程」と略称）を開設した。神奈川県内の高等教育機関では、音楽分野初の博士課程となる。どのような音楽家・研究者を育てることを目指しているのか。根木昭先生（音楽研究科長）、江口文子先生（博士研究指導教授）、加藤大樹さん（博士課程・音楽芸術表現専攻1年）にお話を伺った。



博士課程設置の経緯、研究テーマは？

なぜ博士課程を設置したのか

—博士課程が開設された経緯、また履修カリキュラムを教えてください。

根木昭先生：世界的趨勢としてDMA (Doctor of Musical Arts) という世界共通の学位をもって演奏活動や音楽教育に携わることは、これからのステータスとして必要なのではと思います。その意味で、表現領域の博士課程の設置は必然の流れと考えてよいと思います。

また運営領域のアートマネジメントと音楽療法の各コースは、20年を経てようやく成熟期に入ってきたので、修士課程の上に博士課程を設置し、研究者として、また指導者として活動できる人を養成するのが目的です。

定員は4名ですが、現在は1年生が5名（表現領域3名、アートマネジメント1名・音楽療法1名）、2年生が5名（全員表現領域）です。履修カリキュラムとしては、音楽的素養を幅広く身につけてもらうため、14単位を必修にしています。中でも「音楽と学術研究特講」（選択科目・2単位）という領域横断科目は、各領域の教員・学生が集まってオムニバス方式で討論するという特殊な科目と位置づけています。「身体と音楽」「音楽と社会」など、様々なテーマを扱います。その上で、表現領域では研究演奏または研究作品（作曲の場合）と博士論文及

び試験に、運営領域では博士論文及び試験に合格することが必要です。

博士課程の研究テーマ

～演奏表現・ピアノ専攻

—加藤さん（博士課程・音楽芸術表現専攻1年）はどのようなテーマで研究されていますか？

加藤大樹さん：私は現在、ベートーヴェンの最後の3つのピアノソナタ (Op.109,110,111) を取り上げ、それらを一連の作品として捉えた時に浮かび上がる作品像を、楽曲分析や、日記・会話帳といったベートーヴェン自身の言葉が記された資料をもとに研究をしています。幼い頃から、なぜベートーヴェンの音楽を聴くと、生命を揺さぶられるような希望に満ち溢れたエネルギーを感じるのか不思議でいました。それは彼の天性のものなのか、苦悩と葛藤の人生の故なのか。私にはベートーヴェンが、伝統的な西洋の考え方の枠組みでは捉え切れない突き抜けた何かを、彼の内部に成就していたように感じてなりません。その秘密を探りたいと考えています。

博士課程学生が集まってディスカッション

—江口先生は加藤さんを学部・修士時代からご指導されてきて、博士課程の今をどのようにご覧になりますか？

江口文子先生：急速な時代の変化や伝達手段の多様化にともなってクラシック音楽に関わる私たちが今

※音楽芸術専攻で領域が二つに分かれており、声楽・器楽演奏・作曲分野は表現領域、アートマネジメントや音楽療法是運営領域となる。

後どのように学び、伝えていくかということとはとても重要なテーマだと思います。博士課程での3年間はこれまで積み重ねてきた研究の仕上げの時間であると共に自己の人格と音楽を確立していく時期だと思っています。加藤さんはこれまでコンサートやコンクールに費やす時間が多く、忙しい日々を送ってきたと思いますが、博士課程に入ってから総合的に学ぶ時間が持てるようになったのではないのでしょうか？昨日も博士課程の学生3人でディスカッションをしました（『音楽と学術研究特講』）。普段はなかなかじっくり話す機会がないので、そのような輪が出来てよかったと思います。

—豊富な海外経験や日頃から先生や色々な方と接する中で、自分を客観視し、根源的なアイデンティティーに関心が向いてきたのですね（修士課程ではピアノ奏法研究）。その他の博士論文はいかがでしょう。

根本先生：歌の学生では「オペラ史」「イタリアにおけるワーグナーの受容」「歌唱法」などがありますが、表現領域の学生は作品や作曲家を研究対象にすることが多いですね。アートマネジメントでは「地域オペラの振興」、音楽療法では「音楽療法士の専門職性」をテーマとしています。

博士課程は、第一義的には大学の研究者になって頂きたいのですが、最近では博士号を持って多くの方面で活動する人が増えてきています。たとえば国際機関やシンクタンク等で働くことも想定されますし、文化芸術支援団体のプログラムディレクターやプログラムオフィサーなどの新たな職種が出来つつあり、これらの分野での活躍も期待されます。

社会に向けて

アーカイブ事業など

～研究成果をどう社会に生かす？

—研究を深め、より調和の取れた社会創りの担い手として活躍される方が増えてきますね。大学と社会の繋がりという点では、何か新しい動きはありますか？

根本先生：博士課程の社会との繋がりとはこれからの課題ですが、学術研究という面では、大学の付属研究所であるオペラ研究所が、研究活動の一環としてオペラ年鑑を作成しています（文化庁委託事業）。また、オペラ研究所とバレエ研究所は、アーカイブを構築中です（文科省助成事業・オンラインで一部公開中）。政府の「文化芸術の振興に関する基本的な方針（2012年）」によれば、アーカイブは一か所に集中させるのではなく、各学術機関が特色を出して分散設置という方針を示しています。本学はバレエやオペラ情報についてはアーカイブの拠点になりつつあります。それ以外にも、アートマネジメント研究所、音楽療法研究所、歌曲研究所、ピリオド研究所、音楽教育研究所があり、各専門分野のバックアップを目的として研究を推進していますが、音楽療法研究所などは、音楽療法を通じて社会と密接な関係を持っています。

シニアも続々学び舎に

～短大「音楽と社会コース」

—アーカイブ構築と研究は、今後ますます重要になりますね。ところで昭和音大短期大学部には「音楽と社会コース」があるのですね。

江口先生：「音楽と社会コース」はシニア世代の方が多く、在学生には70代後半の人生の大先輩もいらっしゃるようです。通常は2年間で修了するカリキュラムを3～4年かけて学ぶこともできます（長期履修学生制度）。今年度は2名の方が入学されました。入試面接のときに志望理由をお伺いしたところ、「『音楽と社会』という名前が心に響きました。歌を学びたいので遠くても通います」とおっしゃっていました。感性が豊かで何をどのように学びたいかという目標もはっきりされていて素晴らしいと思いました。今後はぜひ現役の社会人の方にも学びにいらして頂きたいと思います。

根本先生：博士課程でも、アートマネジメント専攻の博士課程生は、新国立劇場研修所を修了し、1年の

在外研修後、現在も二期会を中心に活動中で、地域オペラの振興をテーマとしています。また、音楽療法士として様々な施設で経験を積み、それを続けながら博士課程に入ってきた方もいます。特に運営領域では、社会人あるいは社会経験のある方が多いですね。大学院が、現役の人たちのブラッシュアップの場であるとすれば、「音楽と社会」コースは、一線を退いてもなお向学心に燃えるシニア世代の方たちの期待に応えるものとなっているようです。

—やはり現場経験の中から、「もっと深く研究したい」「もっと現場を良くしていきたい」という気持ちが出てくるのでしょうか。またシニアでも学習・研究意欲に満ちた方がたくさんおられるので、このようなコースが全国的に増えるといいですね。

番外編 音楽で思考法や創造力を養う ～国際バカロレア

東京学芸大付属国際中等教育学校

昨今日本でも広まりつつある国際的教育カリキュラム「国際バカロレア (IB, International Baccalaureate)」では、芸術科目も重視されている。今回は、2010年度より国際バカロレア認定校となった東京学芸大付属国際中等教育学校にお伺いした。同校は国際的に活躍できる人材を育てるという方針のもと、2014年度にはスーパーサイエンス・ハイスクール、2015年度にはスーパーグローバル・ハイスクールにも採択されている。彼らはどのように音楽を学んでいるのだろうか。音楽科教員の水本肇先生（東京学芸大作曲科出身）にお話を伺った。



国際バカロレアで音楽を学ぶとは？

どの授業にもディスカッション&プレゼン

—国際バカロレアのカリキュラムを見ますと、各教科の知識だけでなく、その知識をどう活用していくのか、方法論を身につけることが重視されている印象がありますね。音楽の授業はどのように展開しているのでしょうか。

水本肇先生：国際バカロレアのカリキュラムに合わせて、英語も使いますし、ディスカッション（討論）やプレゼンテーション（発表）は全ての授業に入っています。たとえば中1～2年生の合唱では、“Take Me Home, Country Roads”を教材にして、日本語・英語バージョンを比較しながら、日本語と英語では文法上どのようなズレが生じるか、聴こえ方がどう

変わるのか等を理解していきます。たとえば『アナと雪の女王』では、“Let it go”と“ありのままの”の語尾の母音が同じ韻を踏んでいるから良い訳、といった具合です。



水本肇先生

高1の授業では、サザンオールスターズ『いとしのエリー』とレイ・チャールズのカバー曲《Ellie, My Love》の両方を歌い、ジャンル、聴こえ方、メロディラインの違いや、それぞれどこが良いか・今イチか、などを討論して発表させます。さらに、オリジナル曲とカバー曲にはどういう違いがあるのか、なぜオリジナル曲以外のアレンジが生まれるのか、レポートを書かせて評価しています。決まった正解はないので、自分なりの答えを参考資料なども挙げながら書いていけばOKにしています。高校生なのでなかなか面白い答えがありますね。高2では日本語から英語にアレンジし直して、自分で考えた編成でアンサンブルをしてもらいます。

また入学式には全員で《We are the World》を歌うので、その練習の合間に、ドキュメンタリーやメイキングビデオを見せたり、ディスカッションやレポート作成もします。これは「人を救うには何ができるのか」という探究テーマに基づいています。

楽器演奏

—1曲から様々な学びを展開させていく、興味深いアプローチですね。楽器演奏の機会はどのくらいありますか？

楽器演奏は6年間で30%くらいですね。中1は合唱や鑑賞が中心で、中2から楽典を勉強し、リズム演習をします。リズムの書き取り→8小節からオリジナルリズム作品を創る→自分で創ったリズムをもとにボディパーカッション（手拍子、スナップ、膝、ストンプ、口、など）という流れです。1学期末には、1グループで16小節以上のボディパーカッションの作品を創ってもらいます。

中3は初心者向けギターの授業で、コードを4種類覚えて弾き歌いをします。《Take me Home, Country Roads》はオープンコードだけで弾けるので、これを3学期かけて習得し、学期末試験が終わってから一人ずつ演奏試験をします。

高1は伝統的な和太鼓の叩き方の型を勉強してから、八丈太鼓で即興リズムを叩かせます。まず全員で同じ2小節の型を叩いた後、ソロで即興表現をしながら全員1周します。あとはボディパーカッションですね。

IBの学習プログラムは世界共通ですが、世界各国で、その国独特の楽器や音楽を用いてプログラムを実施しています。先述の和太鼓もそうですが、日本も日本人に合うようにローカライズさせるのがいいと思います。文科省的な音楽学習内容も加味しながら、また、入学式や合唱祭などの学校行事なども踏まえながら、MYPの理念やプログラムを中心とした授業を考えています。IBの良い部分と、本来音楽を楽しむという部分をどうバランスよく入れられるかをいつも考えています。

※高1では音楽か美術を選択、高2から自由選択となる。

学際的な学びも

—国際バカロレアといえば学際的な要素も含んでいる印象もありますが、音楽と他教科を組み合わせたような授業もありますか？

他教科の要素を取り入れた学際的授業の展開として

は、「世界平和のために何ができるのか」をテーマに戦争の悲惨さを訴える動画を作成したり(芸術科×情報科×社会科)、地域のごみでモニュメントを創りいかにゴミ分別のマナーが悪いかを訴えたり(芸術科×家庭科)、『花は咲く』プロジェクトは本当に復興支援に繋がったのかを考えさせるディスカッションもしました。

中1にはいきなり重いテーマだと難しいので、「ショートムービーを作ろう」を課題にしました(音楽科×情報科)。まず音楽科で、BGMや効果音が人間の心理や価値観にどれだけ影響しているのかを勉強した後、情報科で著作権やモラルなどのメディアリテラシーを学び、映像作品を制作しました。作品発表+解説プレゼンで、総合的に評価しています。

—中1から、このようにテーマに沿って実践的に取り組めるプロジェクトがあるのはいいですね。音楽心理や情報リテラシーなどの学びもありますし、完成作品も楽しそうです。先生方が参考として創ったムービーも分かりやすく面白いですね。

※IBには現代的な課題を解く力として「芸術運動や芸術そのものと社会とを結び付け、社会にアプローチできる生徒」を、また知識とイメージを自分で再構築する力として「一人ひとりが“アーティスト”として自覚を持ち、表現を追求し続けられる生徒」を育てるという教育方針がある。

国際バカロレアのシステム

どんな人物を作りたいか

～まず評価指標・方法ありき

—学生の評価はどのようにしているのでしょうか。

IBの学習は逆向き設計で、単元を設定する上でまず先に目指すべき目標、達成すべき目標があります。「この目標があり、こういう評価をしなくてはいけないから、こういうプロセスが必要・・・」と考えていきます。生徒には「今回の単元はこの観点とこの観点を使います。満点を取るにはこれだけでできてほしい」という表を最初に見せます。参考として、模範作品や昨年の生徒事例などを見せることもあります。MYPは実技だけでなくレポートなどの提出物が多いですね。

※観点

観点A	知識と理解（最高8点）学期末テスト、ワークシート、基礎的な作品
観点B	技能の発展（最高8点）作品・実技テスト
観点C	創造的思考（最高8点）Inquiry Questionsに応えるレポート（ディスカッションや小論文など）、グループワーク
観点D	鑑賞（最高8点）DW（プロセスの記録と振り返り）、相互評価

ーIBカリキュラムに従って、実際の授業の進め方、教材の選び方、質問内容などはすべて先生が考えるのですね。

はい。IBは答えがない探究型で概念的な学習が中心です。重要概念（Key Concept）、関連概念（Related Concept）、グローバルコンセプト（Global Concept）がありまして、それを踏まえながら、各教員が探究的質問（Inquiry Questions）を考えます。こちらは参考例です。

①事実に応えられる質問：

ジョン・レノンとオノ・ヨーコはどのような活動をしたか。

②概念的な質問（少し考えないと議論できない質問）：

芸術運動は社会にどのような影響を与えるのか。

③議論を喚起する質問（答えのない質問）：

芸術は世界を平和にすることが可能なのか？

一本質的な質問を考えるのは簡単ではないですが、そこがとても大事で、作曲科出身の先生ならではの創造力が発揮されていると思います。IBカリキュラムで育った卒業生の進路についてお伺いできますでしょうか？

これまで3回分の卒業生を出しましたが、ハーバードやイエールなど海外大学に合格する卒業生も出ています。先日学校説明会で卒業生何名かに、「IBカリキュラムが今どう生きているのか」を訊ねたところ、大学のレポートや課題が難なくこなせて簡単に感じるほど、とのことでした。来年からDP（ディプロマ）（国際的に通用する大学入学資格の取得を目指すディプロ

マプログラム）が始まりますので、より海外進学が増えていくのではないかと思います。